

鈴木氏は、法政大学を1966年3月に卒業後、左官道具・大工道具などの販売をする家業を継ぎながら、それらの商品に興味を覚え、数十年にわたって独学で調査・研究をし、業界新聞やインターネットに数多くの論考を発表して来ました。

それらの成果を、2011年8月に『日本の大工道具職人—世界に誇る日本の大工道具文化を後世に伝える記録—』(246頁)、2012年9月には『続・日本の大工道具職人—世界に誇るこれは文化であるレクイエム(鎮魂曲)として堂々完成—』(262頁)を(株)財界研究所から出版されました。

この二冊の著書は、国立国会図書館や関係機関などにおいて今までにない研究アプローチであり、今後の大工道具研究に際して貴重な資料となると高く評価されています。

その後も、さらに調査・研究を続け、① 鋸齒の江戸目出現時期、② 鑿や鉋の裏スキ、③ 仏像彫刻と鑿の発達との関連、④ 大阪の大工道具鍛冶の名工松原善作、⑤ 東京の鋸鍛冶を中心にした系譜、⑥ 天然砥石の歴史と大工道具との関連についての論考を発表し、また木造建築学の若手研究者などを対象とした国の助成プロジェクト講座で講演もされました。

これらの過程を通じて、いままでの調査・研究の集大成である大工道具研究の新しい体系を構想し、その一部を学生時代のゼミの恩師である岡田裕之名誉教授が主宰する法政大学世界経済研究会で発表するなどして、日本における大工道具の発達の歴史を多面的に捉えた大工道具文化論として、また新しい学問領域を開拓する試みとして、『大工道具文化論—半世紀にわたる研究の集大成 日本初の大工道具文化論として完成—』(301頁)を(株)財界研究所から今年の5月に出版されました。

—第1章—

木造建築に携わる工匠呼称の変遷では、古代から今日まで木造建築の工匠たちがどのように呼ばれて来たのかを考察すると共に、近代的な建築学である構造力学や材料力学がない時代に、建築工匠たちはどのような方法に基づき大規模な建築ができたのか、また古代における大工道具の所有形態を考察しています。

—第2章—

この章では、大工道具やそれらを造り出した職人の人たちに対し、大工職の間で長く語り継がれる12の言い伝えを詳しく紹介しています。

—第3章—

大工道具の歴史とその研究では、日本の古代における製鉄と鍛冶の伝播ルート、古代における都の遷都史、人口数から見る国家と都市や新しい文化をもたらした渡来人の規模、大工道具産地、大工道具産業などの多方面から見る大工道具発達の歴史と、大工道具研究に関する歴史について考察しています。

—第4章—

手斧始めの儀式の現状と起源と歴史を語り、古代では大工道具に神(精霊)が宿ると畏敬の念を持たれて来たこと、そしてこの儀式に使われた道具の歴史とそれらを造り出して来た職人の人たちを歴史的に考察しています。

—第5章—

現代大工道具の三種の神器では、ノミ・カンナ・ノコギリの頂点の形態である追入鑿・2枚刃鉋・両刃鋸について、古代に中国大陸から伝わり、進化してきた歴史と鍛冶師たちについて考察しています。

—第6章—

この章では、大工道具文化を築いてきた名工たちとして、千代鶴是秀をはじめとして13人の人たちを選んで紹介しています。

補論として、「日本の大工道具職人」と「続・日本の大工道具職人」を出版後に発表した6つの新しい見解を述べた論考を載せています。

この著書は、やさしく読みやすいように書かれていますが、その内容は学術的にも極めて貴重なものと言えましょう。